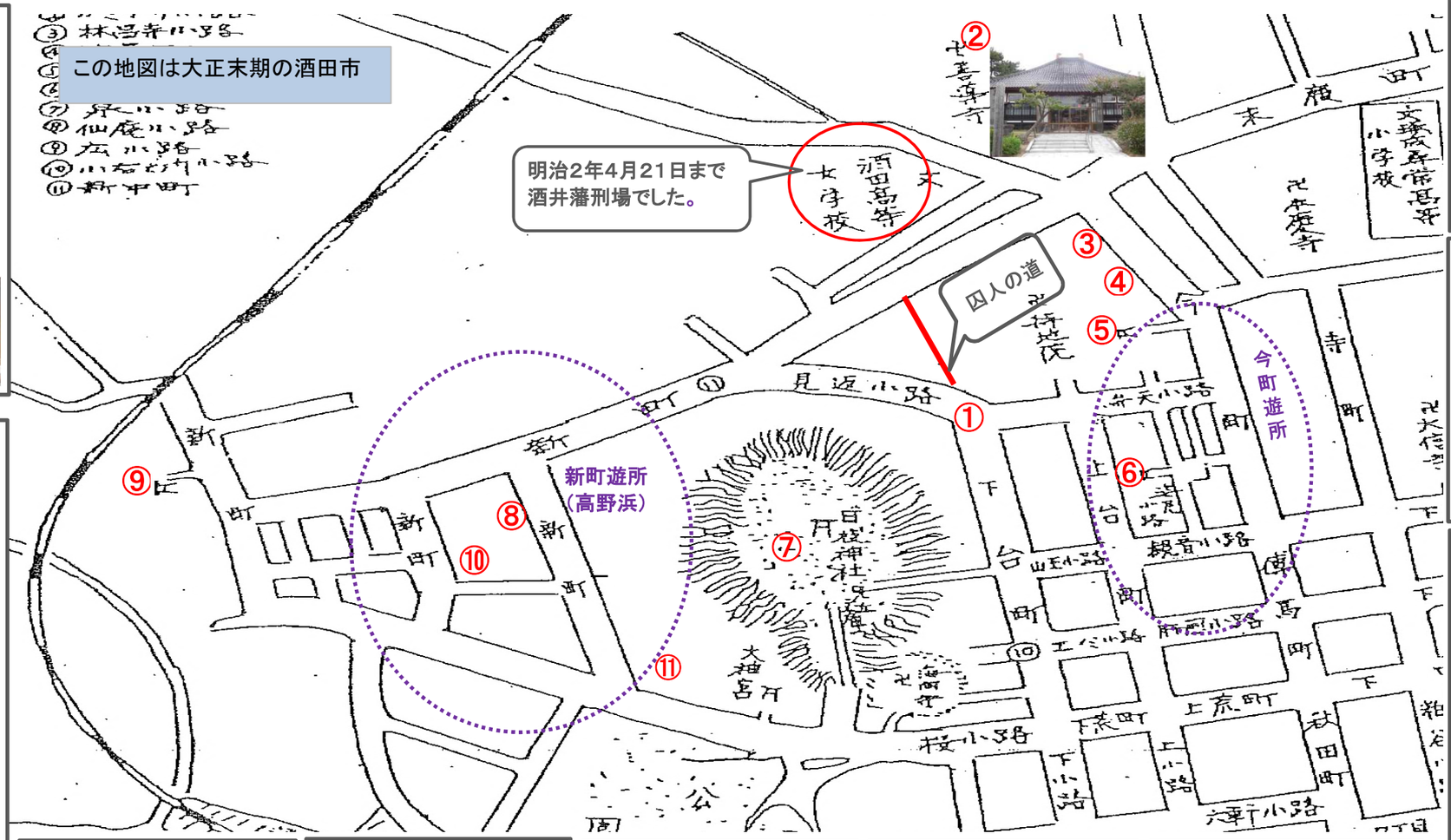
第四回　酒田まち歩き　「首斬り場のお地蔵さん」　～信仰の歴史を訪ねて～

2013.12.1

酒田商工会議所

江戸から明治、大正にかけて隆盛し、酒田甚句にも唄われた花街の面影を巡ります。



①見返小路

小路の由来は、坂を下ると「酒田遊廓」と書かれた2．8mの郭門があり、外に出られない遊女と客が振り返って名残を惜しんだからという説と、右手の細い小路が刑務所に行く囚人が通る道で、ここで身内は一目見たさに待ち、囚人が振り返って見たからという説があります。又、この辺りでは「子別れ坂」と言い、花街に売られる娘と親の別れ坂でした。「松の山の地蔵」も「子別れ地蔵」と言いました。

②悟真山　善導寺

浄土宗のお寺で文亀年間(1500年代初め)開山。明治21年、酒井藩刑場の前に移転。ここでの処刑は明治2年、戊辰戦争で徳川幕府への忠誠を貫いた若い幕臣3名が最後でした。明治35年、刑場跡地に酒田高等女学校の建設が始まり、刑場の「首斬り場の地蔵」は善導寺に移され、「赤子（せきし）地蔵」と名を変え、赤いお堂の中で大切に祀られています。高さ3m、「天保15年（1844）壬辰九月之を立つ」と彫られ田村の三丁目惣右エ門が建立。境内には吾妻屋辰枝とその姪の今咲屋咲江の二つの芸子の碑。歌人、白旗浩蕩の歌碑があります。本堂には鴟尾が乗り、外陣格天井に描かれた見事な龍と花鳥の絵、無量寿堂阿弥陀如来像、一光三尊阿弥陀如来。結婚4年でご主人を亡くされ、尼僧となり、お寺に尽力された83歳の先代御住職のお話は心に染みます。（資料あり）

③今町子守地蔵、水神碑

古くは道路の反対側にあり、この辺りは伝馬をつなぐ広場でした。お地蔵さんは、お堂の中で大切に安置されています。明治大震災で廃業した今町遊所の道祖神が沢山納められていました。良い水だったという井戸の側に明治22年建立の水神碑があります。

④日本基督教団酒田教会キリスト教会

大正13年に建てられた洋風建築です。木造で寄棟、鉄板葺き、正面の尖塔部分が3階、その他が2階と平屋部分があります。酒田では、洋風大正建物は少なく、貴重な存在です。

⑤厳島神社

寛永5年（1620）了現により弁財天を勧進し鎮守としました。福徳、智恵、弁舌、記憶、音楽にご利益があり、七福神の唯一の女神として、酒田全町民の崇敬を集め、今町の弁天様と呼ばれました。祭礼は芸娼妓の踊りなど華やかで盛大でした。

⑥春王山　光國寺

真言宗醍醐派のお寺で永正年間（1504～1521）開山。庄内観世音二十番札所。今町はこの観音様を中心に四方に発展しました。本尊聖観世音菩薩は元禄七年の作。狛犬は子守狛犬です。境内を出ると隆盛の今町遊所でした。

⑦山王の森

山王小路から山王の森に入ります。（酒田十景「山王社雨」）沢山の見所がありますが、今回は松林碑（市有文）。本間光丘が宝暦8年に始めた植林事業は5年かけて完成し、文化13年に植林の功績を後世に伝えようと、有志が建立しました。

⑧新町上通り

「音に聞く高野の浜の賑々しさ
水夫（カコ）も親父も袖ぬらすらん」
と繁盛した新町の痕跡を探すのは難しいですが、面影のある旅館を見つけることができます。

⑨新町稲荷神社

大同2年（807）、御神霊を鎮守とする。弘仁年中（811）弘法大師がここから海を眺め高野浜と名付けたとされ、その時の腰掛石があります。慶長8年、最上義光の寄進で再建。新町芸娼妓の信仰の社。高野浜発祥の地。（酒田十景「高野浜船」）

⑩俵屋

明治後期の概念図、大正期の唄に名前がある俵屋を知る方法はありません。想像するしかありません。持ち主の血筋は途絶え、現在97歳の方が管理しています。空白の看板、三味線掛け、隠し部屋、広い階段、いくつもの物置、中庭には石灯籠、離れ茶室など、長い奥行きの先に部屋が続きます。自治会ではこの建物の保存を望んでいます。（資料あり）

⑪はら宅

酒田で最初にゴム製品を扱いました。昭和8年、地下1階、地上4階、鉄筋コンクリートのゴム倉庫を建設。4階は日和を見る階、屋上からは夕日を眺めました。戦時に攻撃を受け、外壁に銃弾が残っています。母屋は昭和10年に松山の大地主から移築。庭も広く立派です。郭門はここにもありました。

弁天小路小松屋角から下台町まで厳島神社横の通り。厳島神社を今町の弁天さんと呼んでいたことから。

観音小路厳島神社から光國寺の横に抜ける通り。光國寺を今町の観音さんと呼んでいたことから。

姿見小路光國寺から相馬樓と香梅咲の間。芸者が手鏡で姿を見たからとも、客と別れがたく姿を見たからとも。

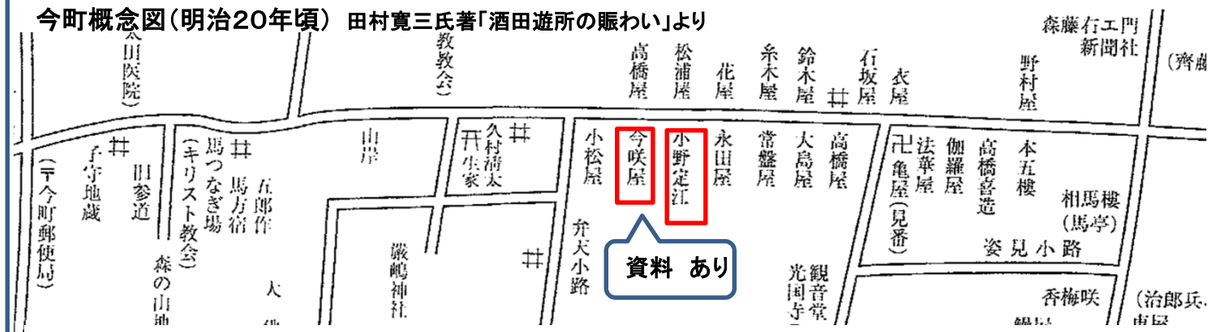
山王小路下日枝神社の東前通り。かつて今町からの入り口に鳥居、神社は東向きでこちらが正門だった。

桜小路日和山から荒町への中間の坂。「花の今町、紅葉の出町、腰はシワイと柳小路、顔はほんのり桜小路、きりょうのよいのは弁天小路、そこに私が浜の町、町は荒町、芽出たい粕谷小路」

三味線小路新町ト一屋前から北への袋小路。佐藤鶴吉という三味線職人がいた。

朝顔小路新町遊郭の上通りと下通りをつなぐ小路。来光堂という写真屋が昭和5年まであり、朝顔が好きで通りに咲かせていた。

今町概念図（明治20年頃） 田村寛三氏著「酒田遊所の賑わい」より



今町で花柳流の今咲屋咲江と、新町で藤間流の吾妻屋辰枝は姪と叔母の間柄で、競い合い、花街を盛り上げました。善導寺には二人の碑があります。「今町の名花」と言われた小野定江は今町と新町で活躍しました。

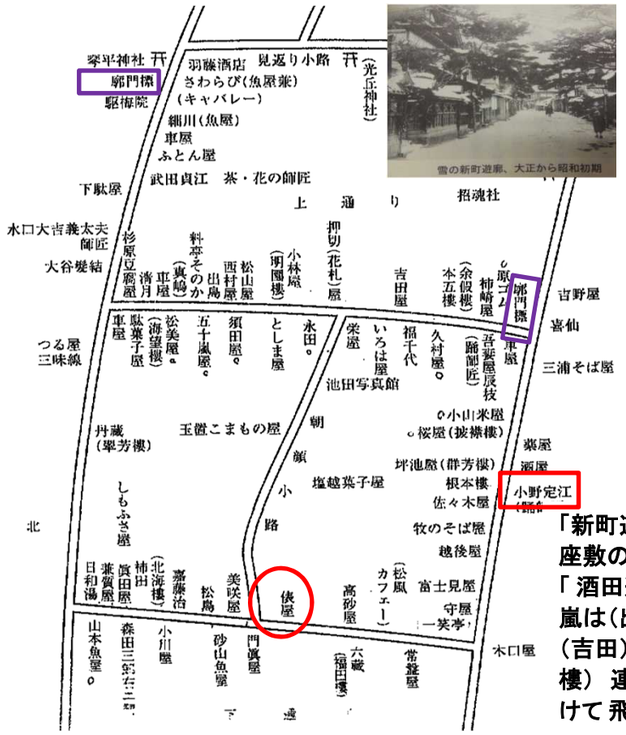
酒田甚句

日和山 沖に飛島 朝日に白帆 月も浮かるる 最上川
船はどんどん えらい景気 今町舟場町高野浜
毎晩お客は どんどん シャンシャン
シャン酒田は よい港 繁盛じゃおまへんか

海原や 仰ぐ鳥海 あの峰高し 間を流るる 最上川
船はどんどん えらい繁盛 さすが酒田は大港
千石万石横付けだんよ
ホンマに酒田はよい港 繁盛じゃおまへんか

庄内の酒田名物何よと問えば
お米にお酒に おばこ節
あらまぁ ほんとすてき
港音頭で大陽気
毎晩お客は どんどんしゃんしゃん
シャン酒田は よい港
繁盛じゃおまへんか

新町概念図（明治後期）田村寛三氏著「酒田遊所の賑わい」より

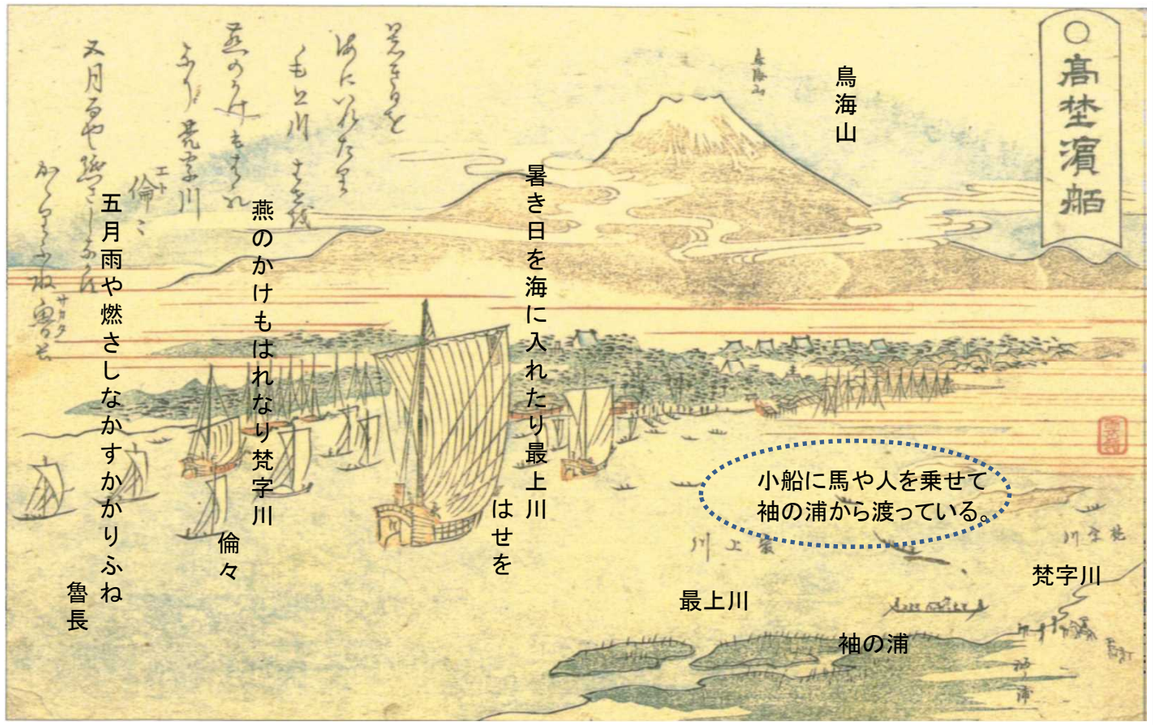


三味線屋、髪結い、風呂屋、写真屋、下駄屋、質屋、薬屋、駄菓子屋、蕎麦屋、桶屋、魚屋、米屋、仕立て屋、布団屋、花札屋、医者、車屋、芸事のお師匠がいて、新町の外に出なくても暮らせました。

原ゴム付近にあった本五楼では若山牧水が大正6年8月に2泊しました。「砂山の陰に早やなりぬ何やらむ 別れの惜しき酒田の港」。正岡子規は「はて知らずの記」で「最上川を渡り限りなき蘆原の中道辿りて酒田に達す 名物は婦女の肌理 細かなる處にありといふ 夜散歩して市街を見る 紅燈緑酒 客を招くの家 数十戸軒をならぶ‥ 」とあり、二つとも日和山の文学碑です。

明治27年、酒田大震災で今町、船場町が大打撃を受け、貸座敷は全て新町に移転しました。そして台町には料亭ができました。貸座敷業とは、芸娼妓に座敷を貸して営業をさせ、その賃料を得るものです。

「新町遊郭楼名づくし唄」作者不明ですが、新町遊郭の貸し座敷の名を織り込み、粋客の間で唄われたといいます。
「 酒田遊郭妓楼によめば 春は三月（桜屋） 風は（松山）嵐は（出島）峰より流るる（三沢屋）で 酒は（丹蔵）で 心は（吉田） （越後）あらうは（俵屋）で あがって 心は（再思楼） 連れの行くのは（松竹）（根本）帰る（浦島）（松美屋）かけて 飛んで行くのは（北海楼）」



酒田十景は 「さかたみやげ」として江戸時代の文久年間（1861～1864）に酒田の風景に宣伝文をつけ絵葉書のように売り出され、版元は本町一丁目、五十嵐仁左衛門、町絵師の五十嵐雲嶺謙雅が描き、版木十枚は本間美術館に現在保存。

参考文献 酒田市作成の資料とガイドブック、田村寛三氏著作の「酒田遊所の賑わい」「酒田の伝説と伝承」「さかた風土記」、三上重義氏著作「庄内酒田写真集」